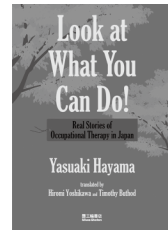


葉山靖明 (著), 吉川ひろみ, Timothy Buthod (英訳)

Look at What You Can Do! Real Stories of Occupational Therapy in Japan

浅羽エリック

(カロリンスカ研究所, 作業療法士)



本書は、脳卒中を経験した著者自身の貴重な体験が書かれており、アントレプレナーシップ、また作業を基盤にした、作業に焦点を当てた臨床に興味がある方にとって面白い1冊となっている。OTを志す人にとっても貴重な本であろう。

近年、社会で作業療法への基本的理解がますます広まってきている。にもかかわらず、作業療法が関連するヘルスケアや教育領域にうまく組み込まれたり、研究基金の獲得、「参加」、「インクルージョン」、「障害」、「仕事」等に関する社会政策に影響を及ぼしたりするには、いまだ課題が多く残っており、より一層作業療法を提唱、促進していくことが必要である。

作業療法の意味を伝える代弁者として、作業療法を直接経験した人ほど適した人はいないであろう。本書は著者自身の経験が綴られており、脳卒中から回復する

苦難とともに、脳卒中という大きな出来事後の人生を再構築するのに、意味のある作業がいかにか大きな可能性をもち得るか、を知るための貴重な資源となっている。本書を読んで私は、精いっぱい人生を生きる勇気と覚悟をもった人がみせるバイタリティ、希望、そして喜びに感銘を受けた。著者の語りは、Groopman¹⁾が述べる「より良い未来への道筋を見た一心の目で見た一時に経験する、高揚した感覚」にも似た、希望感を彷彿とさせる。

著者の葉山氏のストーリーは、脳卒中から回復する人の貴重で正直な経験を伝えてくれ、同じように人生を大きく変える疾病に向き合う人々を勇気づけるものである。感動的なストーリーだけでなく、実践的な例も多く書かれており、作業を基盤にした臨床実践に悩むOTや、新しい実践に挑戦したいOTにとってはインスピ

レーションを得る貴重な資源となる。

著者のストーリーは、教育側に立つ者にとっても価値ある見解を与えてくれる。特に、「本当に大切に、考えるべきことは何か？」をOTの教育者として考えるよう、本書を通して問いかけている。作業に関する知識が研究を通してどう生まれるのか、発展していく知識を大学でどのように教育に組み込むか、それらがどう実践につながられるのか、これらを教育者として考えていくことを、本の中で著者は暗に問いかけている。

文献

- 1) Groopman J: The Anatomy of Hope: How people prevail in the face of illness. Random House, 2004

〔A5判 92頁 2,000円+税〕
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357